

エッセイ 中東奮闘記―湾岸50年、オイルマンの軌跡

第十四回 オマーン国王から勲一等文化・科学・芸術勲章受勲

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

14-1. 受勲の知らせ - 望外のこと

2007年3月に、オマーンの高教育関係機関の要職にあるオマーン人の友人から「2003年8月時点の貴男の経歴書は手元にあるが、それ以降のオマーン訪問、オマーンでの講演やイベント参加、オマーンに関する著作などの情報が欲しい」というメールが入った。4月には、日本への留学経験がある国王府の課長から、「経歴書と著書を送ように」と自宅に電話が入った。

その年の5月25日から6月中旬まで、私は妻とイギリス旅行に出かけた。まずは、「イギリスの庭」と称される風光明媚なサリー州に住んでいた長女の家で宿泊して、近場の名勝地を巡った。1986年に開園したデンビー(Denbie)のブドウ園内の丘の上で、以前に駐在したレバノンを思い起こさせるレバノン杉を見て大感激。その時に、イギリスでは、ウォリック城 やチェルトナムにもレバノン杉が生育していることを知った。

イギリスに渡って6日目の5月30日、まだ私たちが長女宅にいた時に日本にいた次女から、「在日オマーン大使館の大使秘書の方から、『理由は聞いておりませんが、本国からの依頼のようです。大使がオマーンとのつながりが分かるようなお父上の経歴書をいただきたいと言っています』とのメールが入っている。どうしたらよいか」との電話があった。

私は次女に、『私の経歴書』、『オマーンとの関係』、それに『私とオマーン』という文書が私のパソコンに入っている。この3つを秘書の方に送る』ように依頼した。私は、「オマーンに恩返しをしなければ」との一心から、オマーンでの講演、ジャーナリストやビジネスや学术交流の手助け、とりわけ日本へのオマーン人留学生の世話を続けてきた。「オマーンからなにかあってもよいのかな」との思いも少しはあった。

「ひょっとして、勲章でももらえるのかな。まさか。私は名もない一庶民だし・・・」と思い、さして気にせずにもその後もイギリス旅行を続けた。

ギルフォード駅から列車でロンドンにも出かけた。主目的は、大英博物館での「南アラビア室」と博物館周辺の中東専門の古書店訪問であった。前者は2年前に閉鎖されていて、「イスラーム室」に入れ替わっていた。オマーン関係の展示を見ることが出来ずに残念であった。後者は2軒ほど回ったが、探していた乳香関係の本が見当たらなかった。各古書店の書籍数は神田神保町界隈の古書店に比べ様もなく少なく、店内も閑散。神田が世界有数の古書店街であることを実感した。

その後訪れたコッツウォルズでは、イギリスで一番美しい村といわれるバイブリーを初め、ノース・ライヒ、バートン・オン・ザ・ウォーターズ、ロウ・スローターズ、アッパー・スローターズなどを訪れた。その後、ウインチコムで知人の日本人女性が経営するイギリスでも著名なティー・ルームに立ち寄った。6月の心地よい太陽の下のコッツウォルズは大勢の人で賑わっていた。美しい村々の雰囲気を十分楽しめた。

その後、ロンドンからエジンバラに飛んだ。着いた日に家内とスコットランド内の旅行の手配をすべく旅行社を探しながら、エジンバラのハイストリーの交差点で信号待ちをしていると、背後から「ミスター・エンドー」という声。振り向くと、そこに、なんとエクセター大学で隣の研究室にいたイラク人のメヘディ博士がいた。一瞬、夢かと思った。

こんな偶然ってあるのか。イギリスのエクセターに住む者と日本に住んでいる者が同じ時刻に同じ場所にいるとは！「アメージング！」「なんて偶然！」とあまりのハプニングに驚いた。博士はエジンバラ大学に用があり、奥さんと来ているとのことだった。

翌日、ホテルの朝食（ビュッフェ）では、スコットランドの伝統料理「ハギス」を初めて味わった。

その日はネス湖に出かけ、遊覧船の中でイギリス人らしい若い男女と同席した。女性はアイルランド出身で、「英語教師として金沢に3年間住んだ」という。日本語もOK。奇遇だった。日本の食べ物では「すき焼き」と「すし」が大好きということだった。

エジンバラに帰るバスの中で、同行のインド人夫婦と2人の女の子と話を交わしたら、3年間私の自宅からそう遠くない神奈川県大和市の鶴間に住んでいたという。アイルランド美人に次いで日本に住んだ経験のある外国人にまた会った。

翌日は、バスでセント・アンドリュースを訪ねた。目的は、セント・アンドリュース大の著名なアメリカ人の中東学教授とその妻の旧知の日本人女性と会うことと、かの有名なゴルフコースを訪れることであつた。二人の案内で憧れのオールド・コースではプレーも観ることができ、その後別れてゴルフ博物館も楽しんだ。妻と散策した大聖堂とウィリアム皇太子が学んだセント・アンドリュース大学も素晴らしかった。

このスコットランド旅行では、「あわや火災か」という事態に二度度も遭遇した。一回目は、ネス湖からエジンバラに帰るバスでのこと。走行中にバスの両サイドの下部の金属部分が異状に熱くなり、添乗員が点検し、温度を下げるため天井や運転席の窓などを開けっぱなしにしてバスは走行を続けた。しばらく走ると警報が鳴った。停まる。添乗員の点検後にまた走行した。やがてまた警報。社内の温度はますます上がり、その後警報が鳴り続けたが、バスの運転手はこれを無視して突っ走った。そのうちに、警報音が止まり、バスは無事にエジンバラ市に帰着した。バスが火災にならずによかったとその時には胸をなでおろした。

翌々日、ハイストリートにあるホテルで名物のサケ料理を食べ終えて、私がトイレに入ると、店内中に「火災警報」が鳴り響いた。「みなさん店の外に出てください」と言われて、レストラン内の10数人の客と店の前で事の成り行きを立って見守っていた。実際に火災は

なくほっとしたが、とんだハプニングだった。

イギリスから帰国して3週間ほどが経った7月上旬になって、最初に履歴書を送るよう求めていたオマーンの要人から、「カブース国王陛下が、貴男の日本におけるオマーン文化の理解を深めるための努力とその成果に対して、勲一等文化・芸術勲章を授与することを決定した、ここに謹んで報告します。授与式は、私がイギリスでの休暇からオマーンに帰国してからになると思います」とのメールが入った。一連の動きは、やはり勲章授与だったのかと納得するとともに、望外のことであった。

8月上旬になって、駐日オマーン大使館からも受勲の連絡があり、「受勲のためにオマーンに行っていただくことになる。いつオマーンに行けるか」との問い合わせがあり、「9月3日以降ならいつでもオマーンに行ける」と伝えた。

大使館からは、「本国から連絡あり次第連絡する」ということで、その間、背広、ワイシャツ、靴、ネクタイなど一式をデパートで新調し、国王宛の手紙や国王に献上する著書の包装を専門店に依頼するなどして、オマーン行きに備えた。

14-2. 受賞式 - オマーン国王府にて

その後大使館から何の連絡もなくどうなっているんだろうと訝っていたところ、9月に入って在日オマーン大使館から、「受賞式は9月9日、マスカットの国王府で行います。飛行機の切符などについてはまた連絡をします」との連絡が入り、私はお土産の用意などをあわただしく終えた。その切符が手元に届いたのが出発の3日前でひどくやきもきした記憶がある。かくして私は9月7日羽田発のエミレーツ航空で、ドバイ経由でオマーンに向かった。

座席はファーストクラス。エミレーツ航空のファーストクラスには、2005年2月に「マスカット国際フェスティバル2005」での講演会に招かれた時にも搭乗したが、今回はその時よりもずっと豪華なものになっていた。ドアを閉めれば、完全な個室であった。座席が完全にフラットなベッドになるので、足を伸ばしてゆっくりと眠れた。確か、洗面所も付いていたように記憶している。贅を尽くした食事も、CAの給仕で楽しめた。私は記念にキャビンの写真を撮りまくった。

ドバイで乗り換えてマスカット空港に着いたのは、翌朝の9時過ぎ。そこで私は重大なミスをしてしまった。その時の私の服装は、いつもと変わらない中東向けの軽装。半袖のシャツに半ズボン、JICA専門家時代に使用していた古い布製のカバンを肩にかけて濃いサングラスをかけた姿で、機外に出た。

外に目をやると、タラップ下に赤絨毯が敷かれ、それに続く絨毯の先に友人のオマーン人要人、エクセター大学時代の学友でスルタン・カブース大教授のムカッダム、それに国王府の役人と思われるオマーン人数人が、頭にムサラ(ターバン)を巻き、ビシト(公式行事の時や祝賀の時に着用する外衣)を着た正装で、立ち並んでいた。それに背広・ネク

タイ姿の駐オマーン日本大使までもがおられた。私の出迎えに来てくれていたのだった。

そこから空港の貴賓室に案内されて、お茶を飲むにも私の格好は様にならなかった。勲一等の勲章の受賞式に来たのである。しかも、相手は礼儀正しいオマーンの人たち。ネクタイとはいかないまでもせめて長ズボンで上着ぐらい着てくるべきであったと思ったが後の祭りだった。非礼に恥ずかしい思いをした。

その後、国王府差し回しの車でホテルへ。ホテルは、高級住宅街に位置するマスカットで最高級の「グランド・ハイアット」。上層階の部屋からは、緑の樹々の中に広がる白一色に統一されて高級感の漂うシャティ・アル・クルムの住宅群とマスカット特有の岩山の景色が一望できた。部屋に入ってすぐの立派な応接室、広すぎる寝室や一人で寝るには大きすぎるベッド、金びかの縁に彩られた大きな鏡がついた浴室、私がそれまで泊まったことのない最高の部屋であった。ここでも私は存分に写真を撮った。

翌日の9月9日午前10時過ぎ、今度は新調の背広・ネクタイの正装で私は迎えにきた国王府の車でホテルを出た。授与式は、11時からであった。

国王府は、オールド・マスカット地区にある。省庁の中の省庁で、各省庁よりは格上の立場にあり、訪れるのは初めてで、私は緊張感に包まれていた。

到着すると古い建物の中のそう広くない部屋に通され、やがて国王府大臣と高等教育関係機関の要職にある私の友人が現われた。3人でお茶を飲みながら懇談した後に授賞式が始まった。周りに関係官僚、警備官、新聞記者やカメラマンが立ち並ぶ中、私が大臣から感謝状と勲章を受け取り、そこで写真撮影が行われた。

感謝状には、カブース国王の署名入りで「貴殿の文化面での顕著なご努力に感謝して貴殿に勲一等文化・芸術・科学勲章の贈呈を決め、ここに授与する」とあった。勲章は、左胸上から掛けるダイヤモンドが周りに散りばめられた長円形の勲章と同じ幅の濃いピンク色、紺青色、濃いピンク色のすじが入りその先に小さめ勲章の付いた大綬で、大きな箱に収められていた。私からはカブース国王宛の贈り物を大臣に渡した。

贈り物に添えた国王宛の書簡には、「恭呈 市井の一民間人であります私が貴国のためにしてきたことは些細なものであり、受勲の榮譽に与ろうとは思っておりませんでした。それだけに、勲一等カブース国王文化・芸術・科学勲章の受勲は、私にとってこの上ない榮譽であり、慶びであります。私のオマーンへの協力は、ひとえに商工省時代の同僚、エクセター大学での学友とその他のオマーン人の友人の恩義に由来するものであります。私の生のある限り、たとえ些少であっても、この恩義のお返しができるよう今後とも努力する所存です。最後に、国王陛下のご健康と貴国民の今後いっそうの発展を祈念申し上げます」と書かせていただいた。

授賞式終了後は、そのまま日本大使館に赴いて駐オマーン日本大使に受賞の報告をし、賞状及び勲章を見ていただいた。

私の現地での受勲記念パーティーは、日本大使館で2回に分けて行われた。1回目はその日の夕方からの大臣クラスの方を招き、2回目は夜8時から私のオマーン人やその他の

友人たちを招待した。1回目には、高等教育大臣、旧知の商工大臣、外務大臣代理として外務省局長、国王府局長、高等教育評議会事務局長、駐オマーン日本大使など10人近くが集まった。日本大使の祝辞に続いて私があいさつをした。光栄なことであった。

2回目には、スポーツ大臣や商工省次官を含む商工省時代の仲間たち、スルタン・カブース大学の教授たち、エクセター大学時代の学友、民間会社の経営者、日本への留学経験者、その他のオマーン人の友人、情報省や博物館関係のイギリス人女性など40人を超える人が集まってくれた。

授賞式の様子は、当日の昼と夜に現地のテレビでトップニュースとして放映された。翌日のアラビア語や英語の新聞各紙の1面トップにも、写真入りで報道された。私の受賞とともに、「私が湾岸地域と出会ったのは1973年、その後広く中東地域で働いたこと、1992年にはJICA専門家として商工省顧問としてオマーンに赴任し、オマーンの工業発展と人材育成に多大の貢献をしたこと、エクセター大学湾岸研究所の名誉研究員として中東の造詣を深めたこと、OCIPED（オマーン投資促進・輸出振興センター）の日本代表やUNIDOビジネスミッション編成への協力、学術交流や日オ学生交流に貢献したこと、その根底にオマーン人やオマーンという国への恩義を返したいという一心があること」などを報じていた。

授賞式の翌日は、古都ニズワヤ2000メートル級のジャバル・アフダル（緑の山）山系に足を伸ばした。翌々は、商工省やOCIPEDを訪問、懐かしい仲間たちと会い、さらに足を伸ばしてオールド・マスカットやマトラを周り、昼は、高等教育評議会事務局長の祝賀ランチに出席し、その後、近郊のナハル城などを見学した。「もうオマーンに来ることもないだろう」と懐かしい場所をできるだけ周っておこうという思いからであった。これとは裏腹に、その後もオマーンに通うことになろうとは、当時知る由もなかった。

オマーンでの滞在中、空港の出迎えから帰国の見送りまで、日本への留学経験がある旧知の国王府課長のムハンマドがつきっきりで世話をしてくれた。彼に空港で会うなり、「どうして奥さんを連れてこなかったのですか？」と言われた。「せっかくの機会、家内を連れてきてよかったのなら、連れてきたのに。エミレーツ航空のファーストクラスにも乗せてやりたかったし、こんなホテルにも泊めたかった。どうして、先に言ってくれなかったの」と悔しがった記憶がある。

私は、9月11日夜のエミレーツ航空でマスカットを発ち、ドバイ経由で12日夜に羽田空港に帰着した。

14-3. 国内報道 - 全国紙から同窓会誌やタウン誌まで

この受賞は、日本でも全国紙各紙によって報道されることになった。

最初に大きく報じたのは、10月3日（水）付けの産経新聞朝刊であった。それまで、「オマーンが見えてくる」を出版した時に本の広告欄で朝日新聞その他の一面に私の名前が載

り、1996年にエクセター大学アラビア湾岸研究所名誉研究員として渡英する時に日本経済新聞に私の紹介記事が載ったが、それらはいずれもインタビューを受けての記事ではなかった。今度は各紙とも、記者がわざわざ取材に自宅やってきた。なかには、カメラマンが同行しているところもあった。初めての体験であった。

各紙の報道を簡単に紹介すると、産経新聞は受章時の写真入り記事で「石油以外のオマーンも知って」という大きな見出しと、「横浜市の遠藤晴男さん、勲一等文化科学芸術勲章」との小見出しを付けて私の中東経験などを紹介し、「オマーンの魅力をより多くの日本人に知ってもらいたいと訴えている」と結んでいた。

東京新聞は10月12日（金）に、中日新聞は10月13日（土）に「この人」欄に写真入りで共通の記事を載せた。「工業振興貢献を評価されオマーンの勲一等勲章を受章した遠藤晴男さん」という見出しで「オマーンから帰国後1円にもならない地道な活動は、化粧箱を含め重さ4キロの勲章となって報われた」とあった。

朝日新聞は、10月13日（土）付けの写真入り記事で「交流尽力で勲章 日本の民間人初」という見出しで、「オマーンはホルムズ海峡を守る場所に位置し、地政学的には重要。もっと知られていい国ですと遠藤さんは言っている」と結んでいた。

読売新聞は、10月28日（日）の「顔」欄に写真入りで「オマーンからの勲章を日本で初めて受賞した 遠藤晴男さん 74歳」、「前世はアラブ人と言われる」という見出しの記事を載せ、「国同士の関係で重要なのは石油や国の大きさではない。その国の人から学ぶことがたくさんある」、「日本人の目がもっとオマーンに向いて欲しい」と結んでいた。

毎日新聞は、英字新聞の「Mainichi Weekly」の女性記者が取材にやってきた。そして、12月8日（土）に「'Oman' says Endo Haruo 'is my hobby' 「ミスター・オマーン」と呼ばれる男、遠藤晴男さん」という見出しで、「アラビア半島の一角にあるオマーンという国ご存知だろうか？『アラビアン・ナイト』に登場する、かの船乗りシンドバッドの故郷として知られる産油国だ。今年9月、オマーン国王から勲章を受章したオマーン研究家の遠藤さんに話を聞いた」として、写真入りで私の経歴やオマーンとのつながりを紹介し、「日本とオマーンの間には多くの共通点がある」、「オマーンと日本の深いきずなを結ぶ懸け橋になる」などの小見出しで記事を結んでいた。

私の受勲については、母校である新潟県立新発田高等学校と東京外国語大学の同窓会誌でも取り上げられた。それぞれ、「オマーンという国」、「オマーン国王から勲一等—日本人初」という見出しの記事が掲載された。

さらに、以前勤務していた丸善石油の後身にあたるコスモ石油の交遊会誌に写真入りで「遠藤晴男氏 オマーンの文化勲章を受賞」との記事。自宅周辺のタウンニュースにも写真付きの「ミスター "オマーン" 遠藤晴男さん」や「ハンサム'おじさん' のオマーン話」という記事が載った。

14-4. 受賞記念パーティー - 多くの人々に囲まれての榮譽と感謝

帰国してまもなく森谷OCIPED日本代表や丸善石油時代や高校時代の親しい友人たちから受賞パーティーをやるべきだとの声が上がった。私もオマーンのためにもなるとの思いから、これを受け入れた。

当初パーティー会場として森谷がメンバーであった有楽町駅前の外国人記者クラブを考えたが、日本郵船の副社長、郵船航空の社長・会長から首都大学東京（現東京都立大学）の理事長に転身していた竹馬の友の高橋宏が「如水会館にしろ。そこなら俺は顔が利く」と言ってくれた。これに従って会場を如水会館に決め、日時は10月25日（木）18時30分開宴、終宴は20時30分とした。また、パーティーは会費制、世話役を森谷と丸善石油の後輩の植松、発起人を丸善石油関係、オマーン関係、会社、大学、高校時代の仲間その他の12人として、9月下旬に約330名に向けてパーティーの案内状を送付した。事務局はOCIPED日本事務所内「遠藤晴男氏の受勲を祝う会」とした。

パーティー当日の10月25日（木）、在日オマーン大使や当日祝辞を述べていただく人など招待客を含めて280人余りの人が参加してくれた。受け付けは、「日本中東学生会議」メンバーの東大、国際基督教大学、日本女子大学などの学生たち7人に担当してもらった。

入口には、私が属していたNPO「エネルギー・環境・文化国際協力協会」からの大きな祝い花を飾り、会場に入ってすぐの左側のテーブルにカブス国王からいただいた賞状とその翻訳文を展示した。また、別のテーブルに乳香、デザート、デザート・ケーキも展示し、出席者に配布する200袋の乳香と100冊のオマーン情報省発行のオマーン紹介の冊子「OMAN」も置いた。

天年堂の木下が用意してくれた乳香も展示した。横50センチ、奥行き40センチの黒色の木製の台の左側に18センチ四方で高さ4センチの透明の台をおき、その上に最高品質の乳香「ホジャリ」を入れた縦、横、高さ各14センチの透明の塩ビの立方体の容器を置き、台の右側には、英文の説明文が付いた乳香の樹や乳香採取の様子の写真を取めた高さ26センチ、横18センチの額を並べた。高級感のある展示となった。

18時15分開扉。受付に長い列をなして並んでいた参加者が続々と会場に入り、18時40分の開会前に会場は大勢の人で埋まった。私と妻は新調した衣服に身を包み、部屋の正面の一段と高い舞台の裾に立った。私の右肩からは大授章がかけられ、左胸上にはダイヤで縁取られた白金の副章をつけた。いささか面映ゆい気がした。

司会は世話人の一人の植松、ハンサムで格好がよく見栄えがした。私の経歴を紹介した後で、1995年にサイマル出版会から「オマーンが見えてくる」を、2001年には第三書館から「アラビア半島とどう付き合うか」を出版したこと、国内のオマーンに関する講演活動に加えて、オマーンでも「オマーン日本親善協会創立30周年記念講演」やマスカット・フェスティバルの記念講演やオマーン歴史協会、スルタン・カブス大学、ソハール大学、ブレイミー大学で講演したこと、その間OCIPEDを通じてのビジネス促進協力、日本とオマーン学生の交流、オマーン学生の日本での企業研修のバックアップ、NHKや

その他のテレビ局のオマーンでの撮影や学術交流に協力をしたこと、オマーン人留学生への援助や世話等、幅広く両国関係に尽くした」というような紹介があって、祝賀会が始まった。

次いで日本オマーン協会の活動再開のために一緒に汗を流した財務大臣も務めた尾身衆議院議員の祝辞があり、次に福田康夫内閣総理大臣からのメッセージが代読された。福田総理大臣は私と同じく丸善石油で働き、同社では私の2年後輩、その縁でお祝いメッセージを寄せてくれたのであった。

そこには、「この慶事は、遠藤さんが長年にわたり、わが国とオマーン国の友好関係に多大な貢献をされたことが高く評価されたものであり、かつて遠藤さんと仕事を一緒にさせていただいた者としては、わがことようにうれしく思います」とあった。ありがたいことであった。

続いて、駐日オマーン大使の祝辞、さらに萩駐オマーン元日本大使の祝辞が続いた。私には過ぎた人たちからの祝辞であった。大勢の人の前での荣誉であり、「このパーティーは私の葬式にしてよい」と思った。

その後、友人たちの祝辞。一人目は、岡部コスモ石油会長。会社では私の1年先輩であったが、昭和40年代の5年間に亘って同じ部で隣同士の課の課長として席を並べ、2人でよく仕事をし、よく遊んだ仲である。当日、会長は出張中で、あいさつ文を私と丸善石油で同期の山本が代読してくれた。

そこでは、「ゴルフの下手な二人、お互いに社内ゴルフコンペでなかなか入賞が出来ず、エンちゃんが一計を案じて、下手な別の課員二人を加えた4人で優勝カップ、準優勝や入賞の盾を金を出し合って用意。4人だけで偽装コンペを行い、各々が上位入賞を果たしたことにして家に持ち帰って家人に偽の報告をすることにしたこと」、「この偽装コンペを各人が優勝できるように4回行ったが、第1回の偽装コンペの帰りにわが家に立ち寄った岡部先輩が私の家内にばらしてしまっていて大笑いされたこと」、「私が前夜の深酒がたたって、当日のゴルフでは土を掘るようなひどい空振りをしたが、優勝してしまったこと」などのプライベートなことも明らかにされた。

竹馬の友の高橋からは、「遠藤君は、幼稚園から、小学校、中学、高校を通じて机を並べ、切磋琢磨し合い、大学こそ違え、常に交流して励ましあってきた文字通りの心友」と述べ、私のことは「大変な努力家で、真面目で心優しいヒューマニスト。常に温厚で謙虚で、しかも尚『正道を踏んで恐れず』という心構えで毅然たる筋が一本通っている」、「自分は学生時代からの乱暴者で、ケンカ大好き人間で、周囲との摩擦も気にせず強引無暴に突進するタイプで、常に私の反面教師でコントローラーであった」とし、最後に「君のような叡智ある人の活躍の場は無限にある。君の仕事はこれで一段落したわけではない。好漢、益々健康に留意して、更なるご活躍とご発展を祈る」との励ましの言葉で締めくくってくれた。

もう一人の若い頃からの勉強仲間の松尾国際石油会長のあいさつは、同会長のインドネシアへの急な出張で取りやめとなった。

私は、これらに対し、「本日は私の受賞祝賀会にこのようにたくさんの方々にご出席いただき、ありがとうございます。今回私がいただいた勲章はこれでございます。9月9日にオマーンで国王府大臣セイイド・アリ・ビン・ハムード・アルブサイディ閣下より拝領して参りました。

同時にカブース国王の署名入りの賞状もいただいて参りました。あそこに飾らせていただいております。ご覧いただければ幸甚です。今回の受勲理由は司会者のご紹介の通りですが、私が特別なことをした訳ではございません。その時々で一生懸命に対応してきた結果が今回の受賞につながりました。

JICA専門家の時には、若いオマーン人と一緒に汗をかきました。帰国後はオマーンを知ってもらおうと、本を書きました。イギリスの大学では、オマーン人の研究者や学生たちと歳の差も忘れて深く交流しました。1998年の帰国後も、オマーンに行きたい研究者やオマーンの学生と交流したい日本人学生との間をつなぎ、オマーン人学生の日本企業での研修やオマーンと日本とのビジネス促進に協力したりしました。また現地での講演依頼にも浅学菲才を顧みず、やらせていただきました。

一つ一つ丁寧に対応してきて、気が付くとそこにはオマーンとの人的なネットワークが深く広がっていました。今度の受賞もこのネットワークが起点となりました。

オマーンはアラビア半島では日本に一番知られていない国だろうと思います。石油・ガス供給の面でも日本にとって大切ですが、ホルムズ海峡を守っている点でも重要な国です。私にとってはかけがえのないこのネットワークを活かして、今後とも日本とオマーンとの友好促進に貢献していきたいと思っております。みなさまのご指導ご鞭撻をよろしく願います。本日はありがとうございます」と謝辞を述べた。

緒方貞子JICA理事長や塙駐オマーン元日本大使、木村コスモ石油社長、広島オマーン親善協会その他からの10数通ほどの祝電が披露され、最後に森谷OCIPED日本代表の乾杯の音頭で式次第は終わり、19時ごろから歓談に入った。私と妻は、中学と高校の同級生、会社の同期生や職場の仲間たち、若い頃から続けてきたエネルギー関係の勉強会の仲間たち、仕事上での知人たち、私の受賞記事を書いてくれたジャーナリストの人たち、オマーンでの駐在仲間たち、個人的な趣味の仲間たち、妻の友人夫妻、子供たち、孫、兄弟、甥姪、従姉妹などの親戚、オマーン人留学生、日本学生会議のメンバーの日本人学生たちの会場のあちらこちらにできた各グループにあいさつに回り、一緒に写真を撮ってもらった。

かくして、パーティーは予定を越えて9時頃に閉会となった。その後、別室で新潟からわざわざ来てくれた中学・高校の仲間たちとの小宴があり、家内と家路に向かったのは10時を回っていた。

14-5. パーティーから帰途の車中で - オマーンのさらなる発展に向けての決意

次女智子の夫の雅之が運転する帰途の車の中で、さきほどまでのパーティーの余韻に浸りながら、私の脳裏にはさまざまな思いが巡っていた。

まず、目に浮かんだのは、パーティーで祝辞を寄せてくれた尾身衆議院議員、福田康夫内閣総理大臣、ザラファイ駐日オマーン大使、萩元駐オマーン日本大使、岡部コスモ石油会長と高橋首都大学東京理事長の顔。多忙な人たちがよく時間を取ってくれたものだ。

それに、出席してくれた中学と高校の同級生、会社の同期や仲間、若い頃から続けてきたエネルギー関係の勉強会の仲間、仕事上での知人、私の受賞記事を書いてくれたジャーナリスト、オマーンでの駐在仲間、個人的な友人、妻の友人夫妻、子供たち、孫、兄弟、甥、姪、従姉妹などの親戚、オマーン人留学生、日本中東学生会議の学生たちの顔。

九州や大阪からの友人や生まれ故郷の新潟からの高校の同級生が遠くから飛行機や新幹線で駆けつけてくれた。

私は退職者で、社会的な地位もカネもない市井の一介の老人だ。私のためにあんなにも大勢の人が駆けつけてくれた。「こういう人々に囲まれて盛大なパーティーを開くことができた私は幸せ者だ」との至福の思いに浸った。感謝感激であった。

私は、さらにオマーンとの交流のことを思い返していた。

初めてオマーンを訪れたのは、カブース国王がクーデターで父親であるサイド国王を放逐して政権を握った1970年から4年後の1974年4月。丸善石油に在籍中で製油所建設プロジェクト調査のためであった。(第三回参照) 当時のオマーンは日本では今以上に馴染みが薄く、まさに「知られざる国」であった。前王の鎖国政策を放棄して、外国に対して門戸を開き始めてまもなくの頃であり、南部のドファール地方では王政打倒を目指す反乱が続いていて、国の先行きにはまだ不透明感が漂っていた。

2回目にオマーンを訪れたのは、それから11年後の1985年4月。丸善石油を1982年に依願退職後、UAEで事業開発を図るアブダビ興産に転職し、オマーンの要人を頼って同国でのビジネス・チャンスを発掘するためであった。当時のマスカットは、街中が工事現場という感じ。いたるところで白い砂ぼこりを立てながら、トラックが走り回っていた。

現在はオマーンを代表する高級ホテルの一つとなっているアル・ブスタン・パレス・ホテルは、その年の暮れのオマーンで初めてのGCC（湾岸協力会議）サミット開催に間に合わせるべく建設中で、コンクリートむき出しのまま、谷間にひっそりと静まりかえっていた。

この時のオマーンでの事業展開は見送りとなり、私は引き続きUAEでの仕事を東京で統括していたのだが、創立以来順風満帆で成長していたアブダビ興産が1989年にアブダビでのメンテナンス工事で赤字を出した件で、同社の経営陣から退かされ親会社のアブダビ石油に部長待遇で戻され、1991年9月には58歳の定年を迎えることになった。

その年の6月、通産省（現経済産業省）の友人が「コスモ石油（1986年に大協石油と丸善石油が合併して発足）がいまオマーンでJICAのプロジェクトとして、現地の中

小企業振興の指導をしている。ここで働くのはどうか」と声をかけてくれた。

「定年後、出来ることなら中東の現場に戻りたい」と願っていた私は、この話に乗った。そして1992年1月からJICA専門家としてオマーン商工省で勤務し、オマーンに住むことになったのであった。このときは、その後30年以上にわたってオマーンとかかわることになるとは、考えもしなかった。

思えば、1973年に人生初めての飛行機に乗って、人生初めての外国であるイランに長期出張して以来、私には思いもしなかった人生が待ち受けていた

1974年のバイルート長期出張、1975年からの中東事務所（バイルート及びアブダビ）勤務、1977年からのアブダビのウムアダルク石油開発会社への出向、1982年の丸善石油からアブダビ興産への転職、1992年から3年間のオマーン商工省勤務、1995年の「オマーンが見えてくる」の出版。1996年英国エクセター大学名誉研究員、1997年から1年間の再度のオマーン商工省勤務。

その2度目のオマーン勤務から帰国後には、2001年に第三書館から「アラビア湾岸とどう付き合うか」を出版、一方、「オマーンの人々には世話になった。なにか恩返しをしたい」との一心から、日本庭園建設への協力（第十二回参照）、日本やオマーンでの講演活動、オマーン文化の日本への紹介、日本のオマーンに関するテレビ番組制作への協力（第十二・十三回参照）、オマーン人学生への支援、学術調査・交流への協力、両国のビジネスの拡大などに取り組んだ。

これらが認められて、今回のカブース国王からの勲一等「文化・科学・芸術勲章」の受賞につながったのだが、これまで内外を問わず、多くの人々との縁に恵まれたことも大きな力になった。感謝あるのみである。

さらに、車に揺られながら私の脳裏に浮かんだのは、オマーンのジャバル・アフダルやドファール山々、マスカットのシャティ・アル・クルムやカンタブや近郊のイティ海岸、ワヒバ砂漠。それに伝統と近代が入り混じるマスカットの街。美しいオマーンの風景であった。

続いて浮かんだのは、温和で友好的で、他人への気遣いが細やかなオマーンの人々。人柄の良さがとくに際立つオマーンの人々。

なかでも、目をきらきらと輝かせていたオマーンの若者たちの顔が次々に浮かんできた。商工省の次官に昇進したアリ、観光省の局長のサリム。WTOへのオマーン代表としてジュネーブに勤務するヒルダ。民間に転身して活躍していると仄聞しているアハマドとマラック。商工省での仲間たち、欧米の大学を卒業したオマーンの未来の発展を目指す若きエリートたち、それに秘書のOCIPEDで働くワヒーダと財閥の奥方になったアズィザの顔。

彼らとは一緒に会議し、講演会等を企画し、さまざまな工場を訪れた。仕事では指導する立場であったが、お互いに家を行き来し、砂漠で泊まり、オマーンやアラブ社会について学ぶことも多かった。

エクセター大学で一緒に、スルタン・カブース大で教鞭をとっているサリムとムカッダム。UAEの大学で教えているハイサム、ブライミー行政区の長官になっているカリファ、大手民間銀行の幹部になったアブドルたちの顔、みんなオマーンの発展に寄与し始めている。この若者たちにも世話になった。

また、ハムードとアブドラ、それにサレムの顔も浮かんでいた。

アブダビ興産のスポンサーのサガーの店で働いていたハムードとは、アブダビで知り合った。彼はオマーンきっての名門部族の出身で、カブース国王の即位後にオマーンに呼び戻されて、私が2回目にオマーンを訪れた1985年には、1981年に創設された国家諮問評議会の議長を務めていた。その後運輸大臣となり、私がJICA専門家としてオマーン商工省に勤務した時には、寄進・宗教大臣となっていた。私は、オマーン在住中に夕方によく彼の個人事務所を訪ねて、日本とオマーンの関係のあり方について語り合ったものだった。

財閥の当主で、私のオマーンでの居宅の大家でもあるアブドラともよく付き合った。彼は、マスカットの中心部に邸宅を構え、近郊のシーブにゲストハウスを所有していた。夕方、わが家に予告なしにふらりと来てくれるだけではなく、彼の家や別荘にもよく招んでもらった。もともとはマスカット商人の家柄で、オールド・マスカットに当時は従業員の宿舎となっていた先祖伝来の大きな古い家が残っていた。ロンドンでは、イギリス美人を交えてご馳走になった（第九回参照）。

サレムは、彼がスルタン・カブース大（SQU）の事務総長の時に、当時オマーンでフィールドワークをしていた大川真由子の学籍問題で知り合った（第十三回参照）。サレムはオマーン生まれだが、小学校と中学校はバーレーンに学び、その後にイギリスのOレベル（小学校・中学校終了後の全国共通試験）とAレベル（高等学校レベルの全国共通試験）に合格。その後ロンドン大学で学士号、エクセター大学で教育学の修士号を取得した知識人である。

彼は、UAEのザード首長の奨学金を受けていたので、卒業後の1976年から1983年までUAEの国家諮問評議会の事務総長を務めていたが、1983年にSQU創設のためにカブース国王にオマーンの呼び戻されて、その創設や運営に携わった。日本との学術交流の基礎を築いた人物である。今回の私の叙勲に力を尽くしてくれた中心人物でもあった。

車中で、「若者たちが目指すオマーンの発展に私も加わろう、若者やこのかけがえのないオマーンの友人たちの恩に報いよう」、「私ができることはなんでも協力しよう」という私のオマーンへの思いはさらに強まっていた。

14-6. 母校との縁 - 還暦を過ぎてからの東京外国語大学との関わり

私は卒業後母校とのつながりはまったくなかった。東京大学法学部を不合格となり、当

時2期校で最難関の一つだった東外大英米科に入学したが、気持ちの切り替えができぬままに卒業したことが関係したのかもしれない。

母校との付き合いが生じたのは、1995年にサイマル出版会から「オマーンが見えてくる」を出版してからのことである。出版後に東外大の同窓会の「ふるす(FLS=Foreign Language School) という同窓会誌の編集者から同窓会での講演を頼まれた。それがきっかけとなって、オマーンでの勤務を終えて帰国した1998年以来も何回か「ふるす」会でオマーンやアラブの話をさせてもらった。

2000年に、友人のスルタン・カブース大のオマーン人教授が来日した際に、日本で著名な中東研究者の教授に会ってもらうために母校を訪れた。

2007年にカブース国王から勲一等「文化・科学・芸術勲章」受賞してからも、「ふるす」会の後身の「東京外語会会報」2008年2月号にも受賞の記事を書かせていただいた。その年の5月には2008年度の東京外国会寄付講座「地球に生きる—社会人からのメッセージ」で「中東を歩いて30年」という題で東外大の学生向けの講演を行う機会を得た。120人ほどの学生が私の話を聞いてくれた。

そのときの原稿を、以下に掲載する。何かの参考になることがあれば、幸いである。

(1) 私と中東

「私は1957(昭和32)年に丸善石油(現コスモ石油)に入社して、東京と大阪本社で各8年、中東で8年間働いて退社しました。

その後、アブダビ興産という零細企業で10年、オマーン商工省でJICA専門家として4年働きました。その間にエクセター大学で中東の勉強をし、1998(平成10)年にオマーンから帰国後は、日本とオマーンの交流促進に携わっています。

中東との付き合いは通算35年になりました。その間、私はテヘラン、バイルート、アブダビ、マスカットに駐在し、アラビア各地も何回も訪れました。

日本で初めてクウェートからのLPGの直接購入に成功し、バイルート内戦を逃れ、イラン・イラク戦争時にイラクからクウェートまで決死のドライブなどをしましたが、もっとも印象に残っているのはアラブの人びととの交流です。

アブダビでもオマーンでも、現地の友人たちが、時にはベールで顔を覆ったご婦人までもがわが家を訪れ、私と妻も先方の家を訪れました。砂漠に出かけてベドウィンたちとも夜を過ごしました。

昨年私が日本人として初めてオマーンから「勲一等スルタン・カブース国王文化・芸術・科学勲章」を受章したのも、現地の人々との交流の賜物です。

(2) 海外生活の心得

次に、海外で働く機会が多いみなさんに、海外生活の心得を話したいと思います。

第一は、自分一人で生活できること。

心身ともにたくましく、料理なども作れなければなりません。

第二に、言葉に堪能であること。

これは言わずもがなで、東外大生のみなさんはまずは言葉の達人になってください。

第三に、相手国を勉強すること。

これは海外に住む上での基本です。タブーや習慣を知れば、無用の摩擦を起こさないとみえます。

第四に、相手国の文化や慣習を尊重すること。

中東ではイスラームを冒瀆するような行為は許されません。

第五に、日本人租界に閉じこもらないこと。

ほとんどの日本人駐在員が日本人租界に安住しています。現地社会に入り込んで交流することが大切です。

最後に、日本代表であることを忘れないこと。

現地の人たちがあなた方を見て「日本はこういうものだ」と評価します。あなた方は日本人らしく振舞い、日本を語れなければなりません。

(3) 先輩山岡光太郎のこと

日本とアラビアとの交流の中で金字塔を打ち建てた日本人の一人に、日本人として初めてマッカ巡礼を果たした山岡光太郎がいます。

山岡は1909（明治42）年10月に門司を出港、11月にボンベイでムスリムに改宗、12月にジェッダに到着して、マッカ巡礼を終えました。

日露戦争勝利後のことで、マッカのシェリフから「初めて会った敬慕する戦勝国民」として大歓迎を受けています。

山岡は明治37年の東京外国語学校ロシア語学科卒、このような先輩がいることを紹介しておきます。

(4) 諸君には無限の未来がある

次に、みなさんには、無限の未来が開かれていることをお話したいと思います。

私の竹馬の友はいま首都大学東京（現東京都立大学）の理事長を務め、学生の時に「遠藤さん」と呼んでくれた石原慎太郎がいまは東京都知事です。

会社での友はコスモ石油会長・日本アラブ連盟会長の職にあり、会社の2年後輩は総理大臣の職にあります。

私が若いころに加わったエネルギー勉強会からは、大企業の会長・社長や「マネー敗戦」を書いた著名な学者が輩出しました。

若いころには感じなかったのですが、50年の間にこの人たちの未来は大きく開け、私との社会的な地位の差は大きく広がりました。

この差はどこから来たのか、私は長い間観察してきました。

この人たちには、運もあつたがかもしれませんが、

第一に、この人たちは、高い志と強い意志を持続しています。

第二に、恐れずにさまざまなリスクに挑戦してきています。

第三に、多くの人と付き合い、人間勉強を重ねてきています。

第四に、各分野のプロフェッショナルになっています。

第五に、日々人格を磨いてきています。

地球が狭くなって、みなさんにはわれわれ世代よりもっと大きな未来が開けています。また、みなさんはいまから努力すれば何にでもなれます。私と友人たちの歩いた道をみれば明らかです。その時に上述の私の観察を参考にいただければ幸甚です。

(5) おわりに

日本には、少子高齢化、経済の衰退懸念、社会の劣化、食料、資源、環境など問題が山積しています。

この日本が国際社会の中で生きていかねばならないことは明らかです。

この中で必要な知識・技能を蓄えるのに、東外大はこれにふさわしい大学です。

みなさんには、無限の未来を信じ、高い志を持って、大いに励んで行っていただきたい。ご清聴、ありがとうございました。」

この後も私と母校との交流は続いた。

2016年には駐日オマーン大使に母校で「オマーン、日本に一番近いアラブの国」という講演をしてもらった。1995年に拙著「オマーンが見えてくる」を出版した時に、副題としてこれを使った。オマーンは、地理的にもっとも日本に近く、歴史的にも、もっとも近く、文化的にもっとも近いことからの副題であった。

私の本の副題をとった講演を終えた駐日オマーン大使には、東外大のアラビア語科の学生と車座で対話を行ってもらった。同大使からは「若い日本人学生と交流したのは日本に来て初めて。しかも、あんなに多くのアラビア語を話す若者たちとの意見交換は実に楽しかった。忘れられない経験になった」との話を聞き、講演を企画してよかったと思った。

2018年には、日本オマーンクラブ主催の「日本・オマーン人学生交流会」のイベントとして、オマーン人学生を引率して東外大の伝統的な行事である「外語際」に参加した。その時に、同大のフラダンスクラブのイベントに連れて行ったらオマーン人女子学生から、「私たちも女だけでフラダンスをやっているわ」と聞いて、「オマーンの女性もあんな踊りやるの!」と驚いたことがある。

2018年来日したオマーンの現大使は翌年の2019年に、東外大からの招待で同大学を訪れて、それぞれの専門とする言語で演劇を発表する、明治以来100年の伝統がある「語劇祭」を見た。その後大使から、「日本でアラビア語の演劇を見られるとは」との話を聞き、同大学はよい国際交流を行っていると感じた。

2022年4月に同大学で、東外大とオマーンのスルターン・カブース大学との国際学術交流協定の調印式が同大学で行われた。調印式は、駐日オマーン大使立ち会いの下で、スルターン・カブース大学長が事前に署名した協定書に、林佳世子学長が署名することで協定が締結された。来賓として外務省の代表とともに私も招かれ、祝辞を述べた。東外大は、中東地域との学術交流協定は、すでにヨルダン、シリアなどと締結していたが、アラビア半島諸国ではスルタン・カブース大が最初の協定校となった。私には誇らしく、また喜び

の瞬間でもあった。2017年の年央に同大学から「スルタン・カブース大と学術交流協定を結びたい。どのように進めたらよいか」との相談を受け、それ以来協力を続けてきた案件であったからである。

「これから東外大の学生がオマーンに留学することになる。それが連綿と続いて行く。日本にとってもオマーンにとっても素晴らしいことになる」と確信した。私にとってはまさかの60歳を過ぎてから母校とのつながりである。